

毎年十一月三日は文化の日です。「文化」とは、『日本国語大辞典』によると「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高める新しい価値を生み出すもの」と記されています。

世の中の「文化」という存在は、風習・風俗を含むその時代、その国、その地域の人々によって構築された生き方の根底をなすものと言えるでしょう。だからこそ、日々の生活すべてに文化が関わっているのです。

倫理法人会では、昭和五十五年の設立当初から朝礼の持つ力に注目していました。朝礼での「経営理念」や「スローガン」の唱和は、自社の精神を浸透させ、方向性を明確に示す手段となります。これは社歌や校歌などにも共通しています。その中には「文化」が秘められています。「文化」は精神的支柱であり、企業活動の基盤でもあります。

企業文化とは、企業と従業員の間で共有される価値観や行動規範のことで、企業の成長と発展に欠かせない要素なのです。

千葉県千葉市で事務用品の販売やオフィス環境のコンサルティングを行なう今年で創業百年を迎える会社があります。この会社は大正十三年にパイロット万年筆代理店と文具書籍小売店として開業しました。昭和二十年七月の「七夕空襲」により、市中心部は一瞬にして焼け野原となり、文具店も全焼しました。

そうした混乱期に、創業者のS氏は「社会再生のためには教育が最も大切である」との思いから、闇市に出せば高額な利益が得られ



長寿企業への発展の秘訣は 企業文化の継承にあり

る筆記具や文房具を、政府が定める公定価格で学校の先生に優先的に販売しました。

そのため、売掛金の回収は困難を極め、非常に厳しい暮らしを強いられました。育ち盛りの子供八人と住み込み従業員三名を養うため、妻は必死でやり繰りして、闇市に商品を出すかどうかで絶えず口論していたそうです。

しかし、どんなに辛くとも、S氏は「信用が第一」と考え、公定価格で正直に販売し続けました。自分たちの大切な商品を、欲で汚したくなかったからです。その信用が、お客様との関係の構築につながりました。

二代目の時代には新社屋を建て、支店を開設するまでに成長しました。その後、自社でフェアを開催できるよう営業本部を設け、小売部門も外商部門も拡大し、社員は約三十名に増えました。そして、三代目の現社長へと受け継がれていったのです。

三代目である現社長が大切にしているのは朝礼と創業者の墓参です。朝礼では創業者の思いが刻まれた経営理念と行動指針を斉唱しています。新年には全社員で創業者の墓参をし、現社長は妻とともに月に二度墓参に行きます。また、毎年の経営計画発表会では、創業者の思いを改めて全社員に伝えます。そうした取り組みが「信用第一」の精神を社員に浸透させ、百年という長寿企業を維持・発展させているのでしょう。

良い企業文化が社員に浸透すれば、経営に好影響がもたらされ、事業の発展へとつながります。つまり、良い企業文化とは、企業の事業発展において欠かせないものなのです。